

望郷のハワイ——二世作家中島直人の文学

日比 嘉高（京都教育大学准教授）

1 中島直人の面白さ

日系アメリカ人のコミュニティが成熟していくなかで、新しい世代が登場する。アメリカで生まれ、アメリカの市民権を持ち、一世とはまた異なった価値観を保持するようになる、二世たちである。彼らの登場は、コミュニティそのものの大きな転換点であり、ナショナルティやアイデンティティ、文化継承の問題など、移民研究全体の大きな考察課題となっている。ただ文学研究に關していえば、日系アメリカ文学研究は、実はこの二世以降の方が手厚いという状況がある。アメリカでのアジア系アメリカ文学研究は、やはり英語作品・英語文献が中心になるし、その影響を受けた日本における日系文学研究も、英米文学系の研究者が牽引してきた面があるからである。

このような観点からすれば、私がここでとりあげることを選んだ作家は、二世ではあるが少々毛色の変わった作家である。彼は、ハワイで生まれ、主に日本で文学者としての業績を残した。彼、中島直人を論じる面白さは、ハワイ生まれの日本文学者というプロフィールそのものにもあるが、日本でも、米国でも、またハワイでもない場所、自らを見いださざるをえなかった中島の、だからこそ獲得できたパースペクティヴにこそある。彼の移動の軌跡と、それによって抱えこんだへ二重意識は、日本の近代文学と日系移民文学との垣根や、日本／ハワイ／米国、内地／外地（移民地）などといった境界を線引きして理解しようとする枠組みに、再考を迫るだろう。

2 〈昭和文壇側面史〉ではなく

現在の近代日本文学史の中で中島直人の名が現れるのは、ほぼ砂子屋書房の業績をたどる際においてのみであるといっている。この他、昭和戦前期を振り返る尾崎一雄の「あの日この日」、浅見淵の「昭和文壇側面史」などといった回想記のたぐい、あるいは井伏鱒二が比較的多く彼についてのエッセイを残していること⁽¹⁾などから、かろうじて名のみは知られる。つまり、中島直人とは、研究者ですら名前を覚えていた者は少なく、ましてその残された作品を読んだことのある者などいまやほとんどいないという程度の作家である。

作品の同時代的な評価も概して高いとはいえない。中島の作品はその多くが『新科学的文芸』や『木靴』『文学生活』といった同人雑誌に発表されており、評価の高い著名な雑誌に発表されたことは数えるほどしかない。同時代における認知度を測る一つのバロメーターになるであろう『文芸年鑑』（第一書房）の『文筆家総覧』でも、一九三六年度版に始めて登場し「中島直人 東京市中野区宮園通四ノ一〇 塙寮／明治三十七年四月米領ハワイ、オアフ島ワイパフに生る。オアフ島ポールシチー本願寺学園（日本語）ポールシチー、公立学校（英語）ホノルル、カイウラニ・スクール及び早稲田大学に学んだ。小説あり。」（／は原文改行。以下同⁽²⁾）と紹介されるものの、同書一九三七年版「文筆家総覧」では「中島直人 淀橋区戸塚町二ノ一四二 錦志館／明治三十七年生、米領ハワイ、早大修、小説。」と短くなり、三十八年度版以降においては名前すら消えてゆく。自然、現代における評価も低い。個別の論考は一篇も存在せず、もっとも詳しい言及が東郷克美による『日本近代文学大事典』（第二巻、講談社、一九七七年十一月）の記述というありさまである。

よってその評価も、彼のハワイ生まれというプロフィールから単純に演繹されるかたちでなされてきた。知人たちも「彼は東京に生活してゐてハワイの追憶ばかり書いてゐたやうであるが、それは作家としては⁽³⁾あまり健康な道ではなかった」（十和田操⁽³⁾）、「同君のハワイの方を何時も向いて立つてゐた生き姿は一抹の哀愁なきしもあらずの感はあるが、ばらばらなその日その日をひきずつてゐる私どもには羨ましい限りでもあった。／「ハワイ物語」一巻は何よりも人間の魂が卒直に流露してゐる書であると思ふ。こんなに清純な、豊穠な瑞々しさをたたえた書は今時滅多にあらうとは思はれない」（川崎長太郎⁽⁴⁾）。いずれも、ハワイ生まれという珍しい彼の経歴を前提とし、そこから彼の故郷への憧れとそれにもとづいた作品世界を評価する。その際、中島は日本生まれであるへ普通の我々とは切り離された存在として他者化され審美化される。

この評価の方向をより一層明確にあらわしているのが、『ハワイ物語』の冒頭に掲げられた川端康成による序文「『ハワイ物語』に序し、渡航を送る」である。

初め中島君の作品は、海風薫り緑濃き常夏の楽土に嬉遊する少年に似て、自由鮮麗、日本離れた明るさであったが、やがてあのハワイ音楽のやうに、甘美な哀愁を奏で、また移民の果無い現実の悲歎が深まり、遂には流人の虚無頹廢が歌はれ、熟達のみごとは底冷い凄気さへ漂はすに到つた。しかも終始一貫するものは、ハワイの郷土色であり、ハワイへの思慕であり、少年の日の追懷である。少年の心の印象は、なにより真実純潔であつて、新鮮な詩情の源をなし、また痛烈に現実を貫くものであるといふ、文学の尊い一例をここに見る。

一見、「移民の果無い現実の悲歎が深まり、遂には流人の虚無頹廢が歌はれ」というように移民たちの境遇への理解を示しているようにも見えるが、「果無い現実」というようにその理解は抽象的であり、また「流人」という何を指すのか不確かな言葉が「虚無頹廢」と安易に結びつけられて、総じてイメージが先行した上滑りするものになつていない。むしろ川端の着目するポイントは、「楽土」、「日本離れた」、「少年の日」などという用語法からも明らかのように、今ここにある「日本」の現実から隔たった彼岸にあるものとして、中島の文学を美化し、その複雑な風貌を塗りつぶす。

こうした視点からみた中島は「昭和文壇側面史」の一点景として忘れ去られるか、そうでないにしてもハワイを背に負う特異な文学者として隔離されるにとどまるだろう。中島の文学の今日的な面白さは、こうした評価軸からは絶対に現れてこない。評価のパースペクティヴそのものを動かすことが必要だ。

3 ハワイと日本のはざまに

中島の文学を論じる際のキーワードは、「郷愁」や「追懷」「望郷」といった、失われたものの、隔たったものへの慕情

を指す言葉たちである。東郷克美が「少年時代のハワイ生活への郷愁を抒情的に描いたものが多い」（『日本近代文学大事典』）とまとめるように、彼のほとんどの作品の傾向を概括する言葉を探すとすれば、こうしたものが浮かび上がってくるのは間違いないところだ。実際、中島自身も『ハワイ物語』の「後記」において、次のように述べている。

ただただ人間の持つ夢といふものが如何に根強くてもうにもならぬものであることを知った。

私の過去数年間はさういふことで常に引き摺り廻されたと云つてもいい。

その間にはつとつと私の作品は生れたが、この望郷の念は作品を書くことによつて決して削られることはなかった。常に同じ線に沿つて深まつてゐた。

ハワイは作者にとつて唯一の故里である。

その故里へ一度帰りたいのが作者のすべてであつたと云つてもいい。〔…〕

「ハワイ物語」は、私の肉親を始め、周囲の者へのせめてものたむけであると同時に、長い間、無形に有形に私のことを気に掛けてくれたハワイの人達への唯一つの土産である。

故郷ハワイへの望郷の思いを繰り返し繰り返し語るのが、中島直人の文学であるとひとまず我々はいふことができる。だがしかし、それは彼の文学の一面を物語るに過ぎない。彼の「郷愁」は、その隣りにあつたいくつかの込み入った要素の一群と連関しつつ存在していた。それらの要素を総合してはじめて、我々は彼が「郷愁」という言葉に込めたより複雑な響きを聞き取ることができるし、また彼の文学のもつ現代性^{モダン・ナリテ}に気づくことができるだろう。ここではそれらを、へ人の移動、文学の越境へ、（同時代文学の知的枠組みとの関係へ、そしてへ二重意識への三つに整理してあきらかにしてみたい。

3・1 人の移動、文学の越境



図1 32歳の中島直人（『日布時事』1936年12月26日）

まずは彼の移動の軌跡を追う作業からはじめよう。
中島直人は、一九〇四（明37）年四月二〇日、ハワイ、オアフ島ワイパフ（Waipahu）に熊本県からハワイに移民した父母の子として生まれた。いわゆる二世である。

日本からハワイへの移民は、一八六八年五月に日本を発った出稼ぎ人たち（元年者と呼ばれる）に始まる。ハワイ王国との公的な取り決めに従う官約移民時代、民間主体の私約移民時代、そしてハワイ併合を経て米国の移民法に従う自由移民時代、呼び寄せ移民時代、というようにその姿は変わりつつも、ハワイに住む日系移民の人口は増加の一途をたどった。中島が生まれてまもないころ一九一〇年には日本人口は八万人に迫り、商店・寺院・新聞社・医院など日本人コミュニティは着実にその形を整え、生まれて育つ子供たちを教育するべく日本語学校の設立も相次いでいた。この種の学校は「1900年までに10校の日本語学校ができ、生徒数は約1500、その後10年間に140校に増加、生徒数も7000人と急増⁽⁵⁾」していたという。

パールハーバー近郊の集落で生まれた中島も、米国の小学校であるパールシティ公立学校へ通う一方、日本語による補習学校パールシチー本願寺学園に通い、卒業している。彼はその後ホノルルのカイウラニ・スクールへ進んだが、その直後に日本から呼び寄せた兄がハワイに不適応を起こして死去するという出来事が起こる。これを機に一家は父を残して帰国、中島が数えて一四歳の時（一九一九）だった。その後、早稲田大学英文科に進むも中退。一九二八年、同人誌『一九二八』に「すゑぎゆう」を発表以来、ハワイ時代の追憶と回想を中心とする作品を書き、一定の知名度をえていく。一九三六年十二月、念願の帰郷を果たすべく、短篇を集めて創作集『ハワイ物語』（砂子屋書房）を刊行し、渡航費とした。同年十二月ハワイにもどり、一時、布哇中学校で教鞭をとっていた。ハワイの日系三世の女性と結婚、さらに米国本土へ渡り、一九三九年九月サンフランシスコより一〇キロメートルほど南下した町ギルロイ（Gilroy）の日本人学校ギルロイ学園の校長となったが、一九四〇（昭和15）十二月十三日、交通事故でうけた脳の損傷のために死去した。享年三六歳である。

以上が、現在わかる範囲での中島の生涯である。その生は、移動の連続といつていいだろう。熊本生まれでハワイ在住の両親のもとに生を受け、熊本へ帰り、東京へ上京し、その後再びハワイ、そしてカリフォルニアへ。彼の短い三六期間は、まさに移転につぐ移転の歳月だったことだろう。

しかしながら、私はここで中島直人の激しい移動の軌跡を、彼固有のものとして言挙げしようとしているわけではない。彼の文学が、こうした移動のもたらすパスペクティヴによって成り立っているのは間違いない。それは見過ごすことのできない重要な要素ではあるのだが、移動は彼だけの属性ではない。むしろ、日本国内にとどまらず、太平洋を越えて活発に行き来する人々の活動の中に、中島がいたというべきなのであり、このより幅広いコンテクストの存在にこそ注意を向けたい。

たとえば、先に整理したハワイの移民たちは、単にプランテーションで出稼ぎ労働のみを行っていたわけではない。人が集住し、コミュニティが成熟していけば、そこに文化的活動が生起する。文学に関しては、中島の生きた時代には次のような状態になっていた。

布哇の文芸界は遑々たる歩みを続けて今日にいたっている。初代の衰退は同時に日本文芸の前途を憂へしめてゐるが、一面二世の青年男女にして初代と趣味を共にする者も少なからず、これら二世中には母国で教育を受けて帰布したものもあり、布哇の日本語学校によつて母国の文芸趣味を培われたものもあり、やがては初代に代つてこれら二世を主体とするハワイ文芸陣の形成さるゝ時代を予想されている。

ハワイ文芸の発表機関は主として邦字新聞によるが、日布時事紙は毎週一回一ページを割いて文芸作品を掲載し、同胞の文芸趣味を鼓吹して単調生活にうるほひづけている。この他に取扱る、文芸作品はあらゆる分野にわたつてゐるが、同人組織のもとに定期的の集合を持つものは短歌と俳句会のみで、他にこのほど組織されたハワイ・ペン・クラブあり、これは二世出身作家中島直人氏の来布を機とし当市文芸愛好家をもつて結成された新しいグループである。

（『昭和十二—十三年 日布時事 布哇年鑑並人名住所録』日布時事社、一九三七年一〇月、「文芸と演芸」欄、213頁）

ハワイにおける日本語の出版物の歴史は古く、新聞では一八九二年に発刊された『日本週報』にさかのぼる。⁶⁾ 米本土の場合と同じように、日本語新聞が発展する過程で文芸欄が設けられるようになり、内地・ハワイ双方の作者による小説や講談、詩、エッセイなどが発表されるようになる。こうした新聞の文芸欄における「内地」と移民地の混成のありかたについては、別考があるため、ここでは繰り返さない⁷⁾。

引用にもあるように、米国生まれの二世たちからは、学校教育を受けたり日本文化を学んだりするため、日本へいったん帰国したり留学したりする者が現れてきた。山下草園は『日系市民の日本留学事情 附 ハワイ関係者列伝及住所録』（文成堂、一九三五年一〇月）で、「日系市民の日本留学が近來海に旺になつて來た」といい、「幼少時親に伴はれて出生地を引挙げて帰朝したり、或は日本内地の親族とか友人の家庭に預けられて、目下其郷地附近に於て、小学教育から順次に受けてゐる日系市民は全国で約四万人に近くおり、これを「留学」のうちに数えないとしても、「東京を中心として集まる日系市民学生は現在概算五百名に達し、京都、大阪、神戸、広島等に在る者は約五百名」であると見積もっている（2頁）。彼らは日本で過ごすなかでさまざまな団体を組織し、相互の利便やコミュニケーションに役立っていた。

引用後半に見える「ハワイ・ペン・クラブ」も、こうした交流のための団体の一種だったようだ。山下草園の「東京に生れた布哇ペン・クラブ」（『日布時事』一九三七年一月一日、九面）によれば、この倶楽部は「布哇に縁故を持ち、ハワイを愛する同好の士が集まつて、一種の懇話会のやうなものを作りたい」と願つて作つたものだという。このペン・クラブがその後どのようなものになったのは、今のところ明らかではないが、中島直人のハワイ渡航を機に、こうした同好の人々の組織が、日本とハワイの双方に設立されたこと、情報の交換が図られ、太平洋をまたいだ相互援助や仲介などが企図されたことは記憶にとどめておいてよいだろう。

中島直人と彼の文学の面白さは、一つには彼の活動を入り口とすることによって、人々の移動とそれがもたらすさまざまな創成と変容の渦を見ることができることにある。

3・2 同時代文学の知的枠組みとの関係

次に指摘しておきたいのは、中島文学における同時代文学との関係である。彼の作品のほとんどはハワイを扱ったものだが、それ以外の作品も少ないながら存在し、そういった作品からは「ハワイ物語」の作者」という発想では見えてこない彼の別の一面が明らかになる。

たとえば、『新科学的文芸』（一九三一年六月）に発表された中島の短篇「『昼食時間』——それはいつも僕に取つて一つの出来事であつた——」では、主人公の僕（「中島」）はフアスト生命の保険外交員で、昼食時に名前も知らぬ「彼女」を見ることを楽しみにしている。作品のテーマは、さまざまな会社が入った商業ビルの昼食時の活気と雑踏を描写することにあるらしい。デモという素材、ビルの上階から眺めることによって獲得された鳥瞰視点、それによって把握され提示される「群衆」という存在、コラージュとして切り取られ張り合わされる場面の数々、こうしたすべてが、短くたたみかけるような文体で速度をもつて織りなされていく。これは、あきらかに新感覚派以降のモダニズム文芸が発見し育てていったテーマと手法である。一九二〇年代の末から、東京で『新科学的文芸』『木靴』『文学生活』などの同人活動に加わっていた中島が、こうした同時代の文芸の素養を身につけていたのは、ある意味で当然なのだ。

中島にはこの他にも「夢を見る僕」（『作品』一九三一年一月）、「二度目に布哇へ行つたら」（『文学時代』一九三一年二月）のように、夢を扱い、しかも夢と現実を混交させて描く作品もあり、彼のいう「夢」（『ハワイ物語』『後記』）は単純な夢想として考えられるべきではなく、フロイト紹介以降のモダニズム文芸の文脈における「夢」として再考される必要があるだろう。

最後にもう一つ、これは現時点では指摘の紹介にとどめるほかないが、アメリカ文学との関係も当然考えねばならない。田畑修一郎「文学について」（『文学生活』一九三七年二月）は次のようにいう。「今度ハワイ物語を通読して、中島君の文学的教養がひどく皆と変つて外国風であるに気づいた。〔…〕「ミス・ホカノの鞭」の中に中島君らしい少年がマーク・トウエーンを教はり愛読するところが出てゐる。マーク・トウエーンを日本の教室で習ふのと、ハワイの教室で習ふのとではよほどちがふ」。田畑の指摘するように、ハワイで生まれ、その公立学校で教育を受けた中島には、

米国流の教養が身につけていたはずである。中島文学の混成的なあり方の要素のひとつとして、これを見落とすことはできないだろう。

3・3 二重意識

最後に考えてみたいのは、中島が有していただろう（二重意識）についてである。これはポール・ギルロイが『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』（月曜社、二〇〇六年九月）において考察した、「ディアスボラの黒人の抱える根本的な二律背反^{アンタゴニズム}を指し示す」（65頁）言葉である。西洋の内部と外部に同時に存在している者としてとらえられる黒人は、その二重性ゆえにこそ固有のパスpekティブを獲得してきたとギルロイは論じる。中島の経験を、イギリスやアメリカ合衆国における黒人の経験と同じであると主張するつもりはないが、あるシステムの内部——強い権力をもつ——と外部——排除されると同時に必要とされる——に同時に存在する／させられた者たちの引き裂かれた意識の持ちように関するギルロイの議論は、中島直人という人間とその文学を考察する上で示唆に富む。

もちろん、私が行いたいのは、このギルロイの視点を中島に適用することではない。日本とハワイという二つの世界の間で生きた、中島直人という作家の固有のあり方こそが問題である。文化のはざまに落ち込んだ人々の群像、彼らに苦しみをもたらした差別の構造、そしてそのようにしか生きられないがゆえに幻想する美しい故郷——、ギルロイのいう二重意識の別のバージョンを抱え込むことによって、中島は旅をする者のまなざしだけが切り取りえた一九三〇年代の日本とハワイの姿、そしてそこで織りなされる人々の生を、文学の言葉に刻み込んだ。

以下、彼のエッセイ「『赤瓦』の人種」（『文学生活』一九三六年六月）をもとにその姿を探ろう。

4 「赤瓦」の人種

「『赤瓦』の人種」の内容を少し丁寧を追っておく。



「哀し」日系の米市民

恨みは深し寫真結婚

密航の母子送還

図2 「都新聞」1936年3月20日

中島はエッセイを、最近彼が新聞で眼にしたという密航母子の記事から語り起こす。書き写された見出しから推定すると、彼が読んだのは「都新聞」の一九三六年三月二〇日の記事、「『哀し』「日系の米市民」／恨みは深し寫真結婚／密航の母子送還」(図2)であったと考えられる。母は写真結婚で嫁いだものの一子を出産後に離婚、その後帰国するが、二世の子どもが日本になじめない。そこで再度渡米しようと密航を企てたものの、露見し送還された、という事件であった。

写真付きで報道されたこの記事を読み、中島はこの母子のエピソードが彼らだけの問題ではなく、移民として生きる親子たちすべての問題ではないかと問いかける。「この惨めな挿話の母子の悲劇は同時に所謂二世とその親達との殆どすべてが日本へ来て経験することではないか、と思ふのである」。この述べた後、中島は実際に自分たち家族のハワイでの経験、そして帰国したときの経験を語る。一人遅れてハワイへ来たものの不適応を起こして死んだ兄、彼自身の夢見た「日本」とそれへの幻滅、などである。さらに彼は、一九二〇年代、三〇年代に数千人規模で日本へやってきた二世たちにまで問題を広げる。アメリカの日系人の歴史では「帰米」と呼ばれることもある彼らは、移民地で生まれたアメリカ人であるが、両親が日本の文化を身につけさせたい——あるいはもつと積極的に「日本人」としてのアイデンティティをもつようになって欲しい——と考えて日本へ送り込んだ留学生たちである。彼らもまた、先の母子と同じだと中島はいう。エッセイの締めくくりは、中島がハワイにいたころに会ったことのある「山田さん」という男性についてである。彼は密航者だった。中島は、この「山田さん」が国勢調査を機に密航が露見するのではないかと恐怖にかられ、ハワイで自殺したというエピソードをつづる。

このエッセイで合わせ鏡の鏡像のように繰り返されるのは、日本とハワイの間を移動し、その移動がもたらした矛盾と違和によって引き裂かれた人々の苦しみである。「密航」の母子は、夫婦の不和と、子の日本へ不適応と、法の規制とがたまたま運命的に重なったがために、港で立ちつくす惨めな姿を新聞紙面にさらさねばならなかった。絵を描きかけた兄は、ハワイの農園労働の生活に耐えられず精神に失調を来して鉄道へ飛び込んで死んだ⁽⁸⁾。「山田さん」は、密

航という事実よりもむしろ、自らがその脳裏に育て上げてしまった海の彼方にある日本政府の虚像に怯え、何事もいまだおこらないうちに自殺した。そしてこうした群像をつづりだしてゆく中島もまた、いうまでもなくその矛盾と違和の連鎖の一部である。

このエッセイの白眉は、次の箇所である。

私は始めて如何に私がハワイに於て幸福であつたかといふことを知つた。私が悲しいときは、まるで自分の母親の懷ろへ泣いて飛び込むやうに自分の故里のことを考へ、いよいよ悲しいときはいつそのこと帰らうと決心したが、しかしさう決心すると、決まつてその度にあの優しい「母親」は、まるで私を叱るかのやうに、ちつとこちらを見つめてゐる。そして云つてゐるやうだつた。「お前は旅をしろ、旅をしろ」と。

爾來十数年、私は一つの道を歩いて來た。そしてその道が最善な道であつたかどうかは私は知らぬ。ただ、道を歩きなんだか私を呼ぶ声が聞えるやうな気がする。と同時に私は今更らのやうにあたりを見廻すのだ。小説を書いてるといふことは白々しい現実の裏表で、所詮私にとつて郷愁^{ノスタルジー}を匿やす一つの手段に過ぎないのかも知れない。又、いささか運命論者めいて考へると、小説を書いてゐるといふ私自身の姿は、実はいひ換へると絵を描きたくて死んだ兄が抱いてゐた郷愁を日本とハワイにおきかへただけで仕事そのものはそつくりそのまま受け継いでゐるといふことになるかも知れぬ。

私には、密航の少年が同じ運命をたどるやうな気がしてならない。

中島が幻視する「一つの道」の上には、兄や「山田さん」、密航の母子たちの姿が重なっている。その道を歩く彼を呼びとめた「声」が、なにを語つたのかは私にはわからない。ただ確実なのは、彼が彼の小説すらそれをいやす一つの手段に過ぎないかもしれないといった「郷愁^{ノスタルジー}」は、川端のいうような樂園を恋う少年のイメージなどで語られるべきものでは決してないということだ。それはより凄絶な、もつと苦しみに満ちた感情だったろう。だからこそ中島は、ハワイに「母親の懷ろへ泣いて飛び込むやうに」帰ろうとはしなかった。だからこそハワイは、「お前は旅をしろ、旅をしろ」と中島に語つたはずなのである。

「ハワイ生まれ」として日本へ帰った中島を取り巻く人々の目は、暖かいものではなかった。「赤瓦」の人種というタイトルは、次のエピソードから来ている。「いつか、かういふことを中学校のときに聞いたことがある。「汽車に乗って中国地方を通ると、沿線に赤瓦の屋根があつちにもこつちにも見える。あれはみんなハワイ帰りだ」と。その先生には、或ひは私達も亦赤瓦の一族に見えたかも知れない」。おそらくは広島県のハワイ移民を数多く送り出した地域を通りかかったときのことだったろう。何気なく発したかもしれない中学校教師のその言葉の端に、中島は自分たち家族に向けられた蔑視のまなざしを感じずにはいられなかった。井伏鱒二が紹介する、中島の葬儀の席上での次のエピソードも、当時、移民及びその子供たちに向けられた蔑みと恐怖の視線を我々に存分に語ってくれる。

今度の追悼会で私たちは中島君の奥さんに、その自動車事故の模様を質問した。しかし奥さんは日本の標準語がおぼつかない。おばあさんの代からハワイで生活してゐた一家である。お母さんは一度も日本に渡つたことがない。たいていのハワイにゐる日本人は、広島県の方言でお互に用をたしてゐるさうである。私は広島県の生れで広島方言は自由自在だが、中島君の奥さんは調法なその方言もつかはないし英語もしやべらなかつた。「イエス」といふ代りに、こつくりをした。また私たち参会者のうち、誰も英語で話しかけるものはゐなかつた。

へ……へ

木山捷平君のごときは会の始まる前、もし中島君の奥さんが英語で話すのなら帰るぞといふやうな素振りを見せてた。そして奥さんの連れて来る当年一歳の中島君の遺児が、或ひは英語をしやべるのだらうかと木山君は不気味さうに外村君にたづねてゐた。幾度も念をおしてたづねるのであつた。

(井伏鱒二「故中島直人とタメカネ入道」『都新聞』一九四一年一〇月二十八日(上)、二十九日(中)、三〇日(下))

祖母の代からハワイにいた三世の女性が日本語がおぼつかないのは当然であり、突然「追悼会」のために東京へ連れて行かれた彼女が、流暢な日本語を操る文学者に囲まれて、そうした日本語を話す勇氣が出るはずもなく、話せるはずの英語でさえ口に出すのは難しかったに違いない。集まつた面々の中には、英語を話すなら帰るぞといわんばかりの木山捷平のような人間も混じっていたのだから。木山のような人々にとっては、おそらく日本人の顔をして、日本人の血

をもつはずの女性や遺児が、英語しか話せないということは理解を絶することであり、それは幾度も念を押して友人にたずねるほど十分に「不気味」なことだったのだろう。

中島はこうした差別の構造、差別の視線の中に帰国し、成長し、生きてきた。「磔」や「榎の悲劇」といった作品は、幼少時に彼が熊本で受けた傷を題材としている。彼の文学の背後に、移民を別種の「人種」として「日本人」から切り分け、他者化する構造が控えていたことは忘れてはならない。

中島は『鶴』第一輯（一九三四年四月）の「アンケート 何故書くか」という企画に答えて、次のように語る。

私が、あのままずっとハワイかアメリカにゐたら、いま頃は幸福な（？）銀行員か学校の先生かも知れぬ。日本へ帰つて来たばかりに小説を書くやうな運命になつたのかも知れぬ。といふ事は、いづれにせよ、日本といふ国で余り幸福でなかつたといふ事になるかも知れぬ。だから、何故小説を書くか、といふ御質問に対し「て」は、以上のような環境が、それを説明してくれさうに思へる。つまり、日本へ帰つて来たときから、私の一個の人生は、いつの間にか不思議なコースを辿り始めたのだ。文学！その文学は味方でありながら、私の若さをけづり寿命をも縮めるやうな気がする。だが、この道に入つて十年、いまだら愚痴は云はぬ事。少し誇張を交へて私は私の文学的任務（それをもう一度考へてみる事が今日、必要ではあるまいか）を自覚して、こつこつと自分の環境を書き上げてゆくことに一つの責務らしいものを感じてゐる。少くとも、自分自身に常にさう云ひきかせてゐる。ハワイ生れと文学。これ以上書くとうソになる。

中島は「日本へ帰つて来たばかりに小説を書くやうな運命になつた」という。これまでの議論から明らかなように、それは単に地理的に移動したということにはとどまらない。移動にともない、中島が、そして周囲の同様の移民たちが直面せざるをえなかつた多くの困難を、彼は語り出さずにはいられなかつたのかもしれない。母なるハワイに「旅をしろ」とうながされて向かつた「一つの道」の途上で彼を呼んだ「声」とは、もしかしたら彼ら移民たちの呼び声だったのかもしれない。小説を書くことは、その声に応えるために彼が選んだ、一つの方法だったのだろう。

5 「ワイアワ駅」を読む——移動・記憶・望郷

ここからは、具体的に一つの短篇を取り上げ、実際に中島がいかなるテクストをもってそうした「声」に添えていったのかを考えてみたい。分析を加えるのは、「ワイアワ駅」という、『ハワイ物語』の巻頭に置かれた短篇（初出は『文学界』一九三四年二月）である。

物語は、ハワイのパブリックスクールに通う少年ナオトの日常のさまざまな点描をメインストーリーとし、これに新しく日本から呼び寄せられた兄・茂が引き起こすハワイでの生活への不適応、その結果としての死去がサブストーリーとして交差する。兄の事件の直後、事件の結果家族は父を残して両親の郷里に帰国するという結末を迎える。

「ワイアワ駅」がとりわけ面白いのは、以上のような物語が、重層化されるいくつもの語り、記憶によって織りなされていることだ。そしてそうした重なりあうテクスト群を貫いて存在しているのが、旅をする者のパースペクティブである。

まず、日本からハワイへと渡ってきたばかりの茂兄の造形から検討しよう。テクストは、この生まれた場所も違い、受けてきた教育も違ってしまった実兄が、不幸にも落ち込んでいく周囲との行き違いや齟齬を、彼を理解し親しみたいと願いつつも近寄りがたく感じている弟の視線で語っていく。兄は、「ハワイへ来ても昼間キモノを着て下駄ばき」であり、仕事にも参加せず「天女」を描いており、日本の書籍を売る本屋や絵の具商に強い執着を示す。むろん、そうした息子のあり方を、呼び寄せた父は許すはずもなく、父との不和がいつそう茂を追い詰める。

ただし、この関係は一方的に茂が被害者として書かれるのではない。茂は茂で、ハワイに生きる移民たちを見下しており、たとえばそれは「ハワイ生れ」の弟への直接的な蔑みとして表出される。「兄さん、どんな本よんでるか？」と問うナオトに、兄は「まあ、ハワイ生れなんかにはや、さういふ事は分らん」といつて「薄笑ひ」をする。日本とハワイの双方を知り、その間を移動したものの獲得した二重の意識が、こうした視線を可能にしている。このやりきれない齟齬を書き取っているからこそ、作品は、表面を流れる少年時代の美しい追憶のむこうに、ある移民の一家が落ち込んでしまったどうしようもない行き止まりの光景をまざまざと描き出した。

しかもこの作品が優れた仕掛けを行っているのは、こうした旅をする者のパースペクティヴを書き取るのに際して、駅という場を導入していることである。作品の冒頭は、次のように始まる。

ワイアワ駅——それは殆ど名のみで、たまに貨物列車が停つて肥料や家畜の兵糧袋を落として行く位のものであった。

だから、その床を持つた白砂塗りの四角な建物は、幅三間ばかりのワイアワ川の口の所で汽車を見送つてゐるだけだ。

といふより、この駅は、もはや駅の任務を忘れてワイアワ部落の中央にあつて一つの記念碑となつて了つた。試みに、この建物の中に入つてその四つの壁を仔細に見るならば、そこには雑然とではあるが、この部落の持つて来たあらゆる姿が鉛筆、インキ、小刀、白墨その他植物の汁などで銘記されてある。悲喜哀楽！ その何れにせよ、私達はさういふやうな場合、なんらかの形に於てそこに表現しなくてはならなかつたらしい。

それは、また同時に子供の集会室でもあつた。

ここで駅は、「殆ど名のみで」「駅の任務を忘れて」しまったものとして言及される。かつては客の乗降があつたのだろうと想像されるその駅においては、すでに列車は乗客を降ろすことなく通り過ぎ、貨物列車だけがたまに停車して肥料などをおろしていく。それゆえワイアワ駅は、旅客たちにとってはそこに存在するが存在しない、空白の停車場となっているべきだろう。

物語は、このワイアワ駅をはじめ、汽車や馬車などを数多く登場させ、人々の部落への出入そのものをその主要な要素として構成していく。ホノルルの学校へ汽車で通い始めたナオト、ワイアワ駅に列車を臨時停車させて降り立つ駆け落ちした娘カヒナリイ、黒川順一家の転出とさらに続いている友人・熊夫一家の引越、錯乱して飛び出し汽車に轢かれて死んだ兄、そして帰国するナオトたち一家。小説の末尾は次のようになっている。

十月二十五日、私達は急いで父の馬車に乗つて土地を発つた。

そしてその日、入れかはりにワイアワには誰れか越して来るのを見た。

小説「ワイアワ駅」は、こうした激しく出入する人々の軌跡そのものを、駅や汽車、馬車などを移動や旅にまつわる言葉を配置しつつ語る。「望郷」の文学とされる中島の文学であるが、この「ワイアワ駅」のように、やはりそれは移動したものの視点からのみ見えるものであったといふべきだろう。中島は、ハワイのコミュニティを、小さな閉じた集団として描き出すのではなく、複数の交通網の中に置かれ、絶え間なく人々が入り出す開かれた、あるいは変わり続ける集団として描き出すのである。

ここでテキストのもつもう一つの重要な側面に目を転じておこう。それはワイアワ駅のもつ別の一面でもある。先の引用で確認したように、部落の中央にあるという駅舎は、その壁面に「部落の持つて来たあらゆる姿」を刻み込んだたずむ「記念碑」だという。たとえばそれは、「A、小口のヨバン（をばさんの意味）はバナナのア・サンとファネ（怪しいく）。ミーはゆうべ、ここを通るときこの眼でちやんと見たんぢや」というようなものだ。

こうした駅の壁に落書きとして書き込まれた言葉を、コミュニティの記憶を刻む記念として語りながら、同時に語り手「私」は自分自身の落書きをも探し、その断片を列記していくことで家族の小さな歴史を浮き彫りにしてみせる。

ミーのパパーは癒るだらうか。パパーはもう一年近くねてばかりゐる。

〔…〕

ミーにも兄さんがあつたのだ。茂といふ兄さん。名前がいい。十八、ミーと七つ違ひ〔…〕

やつぱり茂兄さんは家と合はなかつた。キャンプでも余り働かないで絵ばかり描いてゐる兄と、さういふ兄を憎むパパー。ママは間に入つて両方か



図3 ワイアワ駅の位置（推定）

地図は1917年

ら叱られてゐる。〔…〕

最初の一行は、五年前のもので、「鉛筆で覚束なげな英語で」書いてあるという。次のは三年前、兄を呼び寄せた当時。最後はつい最近のもの。しかしこの最後の落書きから「私」はすぐ目をそらし、次の落書きをシャープ・ペンシルではじめる。「九月一日！　なんと新鮮なよろこびの日であらう。けふ始めてホノルルの学校へ行つたのだ」。

この仕掛けは、ワイアワの生活に広がっていき、言語的な多様性と混交のようすをはからずも浮き彫りにしている。標準的な日本語から、方言、英語、カナカ語が、落書きの中には入り乱れて登場するのである。これは当然、コミュニティの多様な構成を反映している。日本人移民二世のナオトを視点人物兼主人公としているため、やはり日本人が多く登場するものの、その日本人の中にも一世と「呼び寄せ」（呼び寄せ移民のこと）、二世が登場し、ほかにハオレ（白人）、カナカ、中国人が登場する。ナオト自身、日本語、英語、カナカ語を使用している。

整理すれば、中島の「ワイアワ駅」は、「私」の整序された日本語による語りを主要な物語言語としつつも、そこに時間的にも、方向的にも、また言語的にも多様なコミュニティの言葉を差し挟んでいるといえるだろう。我々はこの少年時代を振り返る自からの過去の記憶を、甘美だがしかしのっぺりした一面的な物語にはしなかったという、中島の選択に気づくべきだろう。中島はその代わりに、時には乱雑にさえ思えるほど、断片化された方向の違う言葉を差し挟んだ。それは部落のうわさ話であったり、悪口であったり、個人的な記憶であったりしたし、日本語であったり、英語であったりカナカ語であったりした。なかでもいっそう重要なのは、中島のテキストが、呼び寄せられた兄と、呼び寄せた父母と、ハワイ生まれのナオトと、その三者の視点をきちんと捉えているという点である。これにより、テキストはその重層性をいっそう増したと言えるだろう。むしろそれは、中島自身の持つヘ二重意識とパースペクティヴが可能にしたものだった。

6 中島直人の文学から見えるもの

ここで思い返しておきたいのは、「ハワイ物語」という短篇集に期待されていた役割である。中島は、「後記」の中で次のようにいっていた。

「ハワイ物語」は、私の肉親を始め、周囲の者へのせめてものたむけであると同時に、長い間、無形に有形に私のことを気に掛けてくれたハワイの人達への唯一つの土産である。

「ハワイ物語」は、日本にいる肉親らへの「たむけ」であると同時に、ハワイの人たちへの「土産」となることを期待して編纂されていた。実際、中島はこの短篇集を手には、ハワイへと渡ることになる。このことを思い返すならば、「ワイアワ駅」というテキストにおいては、二つの方向性が交差するように作用していたことがわかる。つまり、一方は日本からハワイへという著者中島直人のベクトル。もう一つは、短篇の結末で日本へと父だけを残して帰国するナオト少年一家のベクトルである。「ワイアワ駅」は出郷と帰郷という異なった二つのベクトルの交点に位置しているのである。

「ワイアワ駅」は生き生きとした少年の日の思い出と、痛みといとおしみに満ちた家族の物語を描きだしていた。それは過ぎさった過去を呼び返そうとする、中島直人の、個人的な追憶の記念碑だったのであるか。駅に書き付けられた言葉たちは、懐かしい故郷の点景として、私的に書きとどめられたにすぎないのだろうか。戻ることのない思い出をひたすら想起して書き起こす小説の言葉と、駅としての機能をほとんど失った目的のない空間の壁に刻まれた記憶の言葉。それらは中島の出郷と帰郷のベクトルの狭間に、そして日本とハワイとを隔てる狭間に置かれ、いま我々の前に差し出される。

中島に、故郷ハワイを懐かしむ心がなかったわけではない。しかし、厳しい「母」に旅を促がされ、その途上で聞いた「声」に中島が彼の文学によって応えていたのだとすれば、中島直人の試みを、戻ることのない過去を呼び起こそうとする私的な追憶の試みとのみ捉えるのは誤りだろう。周囲との違和の苦しみの中で鉄道へ飛び込んで自死した兄を、中島が自分自身に重ね、かつ日本とハワイを往還する人々のすべてに重ねていたのだとすれば、小説の紡ぎ出す記憶の言葉は、過去にのみ向かっていたはずはなく、また中島個人の思い出をのみ語っていたわけではない。

中島が語ろうとしたのは、ある土地に生い育ったものの、そこに根ざした経験や感性ではない。一見ハワイに執着する彼の文学は、そうした土着性を指向するかのようにも受け取られかねないが、そうではあるまい¹⁶⁾。生地から引きはがされ、母語から疎外され、それでもなお失われた故郷を恋わずにはいられない人々の苦しみと喪失と郷愁を中島は描いている。それは作品の表面を流れる抒情ほどに、甘美なものではない。二つの文化の狭間に落ち込んだ者たちの痛みが、「母」から旅をせよと宣告された者たちの苦しみ、彼の言葉の上には堆積しているからである。彼の文学が今、私たちのもとに届くのは、そうした狭間からの声を響かせているからだろう。

*

*

中島直人は、ハワイへ帰った後、エッセイのみ発表し、小説は書いていないようにみえる。今後、発見される可能性は残されているが、「日本へ帰って来たばかりに小説を書くやうな運命になった」(前掲「アンケート 何故書くか」という中島が、ハワイに戻って書けなくなった理由はわからなくもない。その意味では、カリフォルニアへ渡って以降の中島が見せたであろう新しい展開が期待された。しかし、その日はついに来ることがなかった。米国本土へ渡航して程なく、彼の運転する車は、ソーダ水を運搬するトラックに突っ込んだ。二週間後の一九四〇年一月三日、彼は脳内出血で死んだ。

だがある意味において、このタイミングでの死は、彼にとって幸せだったかもしれない。彼の愛してやまなかった真珠湾に、日本軍による奇襲攻撃が加えられるのは、ほぼこの一年後である。米国に生きる日系移民たちにとって、もっとも過酷な数年が始まる。

註

(一) 井伏鱒二「二月九日所感」(『早稲田文学』一九三七年四月)、井伏鱒二「雑誌の表紙」(『文芸レビュー』一九二九年四月一日)、井

伏蹲二「中島直人」(『山川草木』雄風館書房、一九三七年九月。篇中の「ハワイ行き」は『三田文学』一九二九年一月、「直人ハワイ行き」は『文芸雑誌』一九三六年二月、「海路の日和」は『文学生活』一九三六年十二月にそれぞれ掲載されたもの)。

- (2) 『文芸年鑑』一九三六年版(一九三六年三月、第一書房)。同書収録の「雑誌掲載目録」には「文芸」八月号に掲載された「キビ火事」が載る。

- (3) 十和田操「『ハワイ物語』から」(『文学生活』一九三七年二月)。

- (4) 川崎長太郎「『ハワイ物語』のこと」(『文学生活』一九三七年二月)。

- (5) 濱野成生「戦前ハワイの日本語学校の隘路——1890年代から1940年代までの問題点——」(『日本女子大学英米文学研究』一九九九年三月)。

- (6) なお英字を含めれば一八八七年創刊の月刊紙『Japanese Times』が古いという。飯田耕二郎「ハワイ最初の日本人による新聞『Japanese Times』の発見」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』二〇〇二年二月)を参照。

- (7) 日比嘉高「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」(『日本文学』二〇〇四年一月)、同「北米日系移民と日本書店——サンフランシスコを中心に——」(『立命館言語文化研究』二〇〇八年九月)。

- (8) 中島「ワイアワ駅」による。「ワイアワ駅」は小説であり、必ずしもこのエピソードが事実そのままであるという確証はない。

- (9) 中島直人「磔」(『早稲田文学』一九三六年七月)、同「複の悲劇」(『新科学的文芸』一九三二年五月)。

- (10) 山下草園は、中島の文学を評し次のように述べていた。「労働者の生活を描き、生慾を描写し、移民心理を写して、一種特異な植民地の雰囲気動きを展開してはみせてはいるが、併しそれは、その地の生活の体験を持つて居る者には、可なりのもどかしさを感じさせられる。何かしら印象の薄い追憶談のやうでもあり、たとへば寝物語りに遠き昔の世界の葛藤を、聞いて居るやうな感じなのである」(前掲『日系市民の日本留学事情』32頁)。中島が描こうとしたのは、ハワイ(移民)土着の生活や感性ではなかったと考えられる。この意味で、山下の感想は「正し」。

「付記」中島直人については、最初に東郷克美氏よりご教示を賜った。記して感謝申し上げます。また本論文執筆に際しては、文部科学省科学研究費助成金(若手研究B、課題番号18720043、研究課題「北米日系移民の日本語文学に関する総合的研究1868-1945」)の助成を受けている。